
狐神様と鬼娘

天呼 洸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

狐神様と鬼娘

【Nコード】

N3079R

【作者名】

天呼 洸

【あらすじ】

天界の鬼が住む山、大江山の鬼娘『鈴鹿御前』は、天界の白雪神社に住む、チンチクリンな幼女姿の狐神『珠藻』が大好きです。

珠藻も鈴鹿御前が大好きなんです。

でも、珠藻は鈴鹿御前の事を殴ったり、水掛けたり、ウザい消えろッ！っ！と苛めます。

そんな酷い事をされても、鈴鹿御前は珠藻の側に近寄って行きます。

珠藻は鈴鹿御前の事が大好きなんですが、信じられないだけなんで

す。

鈴鹿御前だけじゃ無く、天界の全ての神様達が、信じられないんです。

でもみんなと仲良くしたいと、珠藻はいつも思っていますが、それが出来ません。それは、珠藻が悪い妖怪狐の娘なので、鈴鹿御前以外の神様達は珠藻を嫌い、近寄らず、陰口ばかり叩くからです。そんな事を珠藻はあまり気にしてません。逆になんとかみんなと仲良くなる方法を考えていますが……

兎に角、お互いに大好きなんです。

神々が住まう土地、天界には様々な神様がいます。

私達が住まう下界と同じで天界の神様達にも、様々な生き方があ
る。

例えば、天界に大江山という鬼神が住まう山がある。

その山に鈴鹿御前と言う鬼娘がいます。

そして、天界には白雪神社という神社があり、そこに珠藻という
幼女姿の狐神がいます。

鈴鹿御前は珠藻が大好きである。

勿論、珠藻も鈴鹿御前の事が好きある。

「た〜ま〜も〜♪」

鈴鹿御前は珠藻の事が好きだから、よく大江山から千里程離れた
ところにある珠藻の神社に遊びにいきます。

神社の社の前で鈴鹿御前が珠藻の事を呼ぶと、ガラガラつと襖が
開き、チンチクリンな幼女が尻尾をピンっとおっ立てながら現れま
す。

そして、鋭い目つきで鈴鹿御前を睨み付けると……

「……何？なんか用？」

っと低い声で鈴鹿御前に用件を訪ねます。

鈴鹿御前は恥ずかしそうにモジモジ照れながら、腰につけていた
カゴを珠藻に見せます。

「く、来る途中……川で魚を捕まえたんだ。い、一緒に食べないか
？」

珠藻がカゴの中を覗くと確かにカゴ一杯に魚が沢山入ってました。
暫く、珠藻はじーっと魚を見つめスツと鈴鹿御前に目を向けると、
突然カゴを蹴り飛ばしました。

「うにゃんッ！！」

その珠藻の行為に鈴鹿御前は思わず驚き少し泣きそうになりまし

た。

「ウざい……帰れ……」

その一言を鈴鹿御前に言うと珠藻は襖をピシャツと閉め部屋の奥に行ってしまうのでした。

鈴鹿御前は地面に散らばった魚を一所懸命集めながら『いつか必ず一緒に食事が出来る』そんな日が来る事を信じてました。

珠藻は鈴鹿御前が大好きです。

よく鈴鹿御前を叩いたり、鬼の自慢の角を折ろうとしたり、水をぶっ掛けたりしますが、珠藻は鈴鹿御前が大好きなんです。

ただ、珠藻は信じられないだけなんです。

鈴鹿御前だけじゃ有りません。天界に住んでいる全ての神様が珠藻は信じられないだけなんです。

だから、珠藻は神社によく籠っています。

そしてよく来る鈴鹿御前を追い払います。

今日は読書中に訪ねられ腹が立ったので、

「今度来たらその角をへし折るッ!!」

っと言って鈴鹿御前を追い返しました。

でも珠藻は鈴鹿御前の事が大好きなんです。

大好きだから、友達の作り方っという本を読んでいたんです。

兎に角、お互いに大好きなんです。 （後書き）

初めまして、作者です。

好きをテーマに、四コマ漫画をイメージして書いてみました。

世界観等疑問に思うと思いますが、それは以前から私が構想してたキャラ世界観をそのまま使っているのです。

もし、良かったら評価と感想下さい。

いとウザし……

珠藻は小さな女の子の姿の狐神です。

小さな身体に大きな尻尾があり、常に真っ白な狩衣を身に纏っています。

珠藻は天界の神々にあまり好かれていません。

それは珠藻が大悪妖の九尾狐の娘だからです。

その為、母親と同じ力を持つ珠藻は、天界の神々に恐れられ、疎まれてました。

化け物の娘が神？大罪を犯した娘なのに神になれるとは……

そんな陰口を、神様達は珠藻を見る度に囁くのでした。

その神々の蔑視に耐えられなく誰も信じられなくなった珠藻は、天界の中央からずーっと離れた誰も近寄らない辺境の地……今の白雪神社に移り住むようになりました。

誰にも会うことも無く……静かに暮らしており、これでいいと思っていました。

でもある日の事、鈴鹿御前が白雪神社に現れた事により、珠藻の気持ちも変わっていきました。

……みんなと仲良くしてもいいかな……

鈴鹿御前は鬼の一族です。

鬼族はとっても大きな身体をしますが、鈴鹿御前はあまり大きくありません。外見は16歳位の小娘です。

立烏帽子を被り、色とりどりの着物に真っ赤な袴を着た少女。額から真っ直ぐ伸びた立派な角が一本生えています。

鈴鹿御前は兎に角、元気な女の子です。誰にでも元気に挨拶して、いつでも好奇心いっぱいの子です。

女学生みたいな格好をして、泥んこ遊びをしてそうな鬼娘が鈴鹿

御前です。

元氣な活発な鬼娘の鈴鹿御前ですが、元氣過ぎて、よく失敗するのが玉に瑕です。

ある日、大江山の鬼の子達と山の麓で隠れん坊していた時、道に迷って白雪神社に訪れたのが、珠藻との初めての出会いでした。

雪みたいに綺麗で可愛い子だなあ……

「……何か用？」

珠藻は突然神社に現れた鈴鹿御前に尋ねます。

珠藻に見惚れてた鈴鹿御前は、我に返り珠藻に一礼します。

天界では鬼は神様より身分が低いのです。

「突然の参上ごめんなさい。子供達と隠れん坊してたら道に迷いまして……」

「……道に？」

鈴鹿御前の答えに珠藻はじーと疑惑な目で見つめます。

「は、はい。あの……大江山って何処にあるか分かりますか？」

大江山と聞いた瞬間、珠藻は驚く。

ここから千里ほど離れた大江山からこの娘はやって着たのかと思う。

でも、鈴鹿御前の額から生えた立派な角を見て、鬼ならありえるかもなっと自分の中で納得する。

珠藻は頭をボリボリ欠きながら、面倒くさい表情し、スッと北東に指を指す。

「……あっちの方向に真っ直ぐ行けば、大江山に辿り付ける」

珠藻が指を指す方向を、鈴鹿御前は見つめる。

「あっちですね？」

「……うん」

帰り道が分かると、鈴鹿御前は珠藻の方に振り向き、深く頭を下げ一礼をする。

「ありがとうございます。御座います。狐神さま」

その感謝の言葉は珠藻にとって初めての事だった。

珠藻が生を受け約三百年以上経つが、誰かに感謝された事も、した事も無かった。

あの天界の大女神『天照大神』が珠藻を神様として転生させて貰えたにも関わらず。珠藻は感謝した事がなかった。

この鈴鹿御前の感謝の言葉は、珠藻にとって初めてであり、なんだかこそばゆい感じがした。

「べ、別に大した事では無いが……ここから距離もあるし、よかつたらお茶でも飲んでいくか？」

珠藻は視線をずらし、恥ずかしそうに鼻頭を欠き、視線を元に戻し鈴鹿御前に話掛けると、そこに鈴鹿御前の姿は無かった。

鈴鹿御前は、いつの間にか大江山向かって進み始めており、もう一里程進んでいた。

ふうーっと、何百年ぶりに誰かと話した事に疲れたのか珠藻は大きなため息を吐いた。

だんだん遠ざかり、豆粒の様にしか見えない鈴鹿御前を珠藻は見つめながら、どこかで寂しいような気がするが、ほっとした部分も何処かあった。

そんな鈴鹿御前を見送り、くるっと反転し自分の部屋に戻ろうとすると、遠くから声が聞こえた。

「本当に、ありがとうございます。またあ、お礼に何か持ってきますねえ」

流石鬼と言うべきか、遠く離れた場所から大きな声で鈴鹿御前はもう一度珠藻にお礼を言う。

大江山からは千里も離れた場所だ。二度と来る訳が無い。そう思いながら珠藻は振り返る事無く部屋に戻って行く。

次の朝、白雪神社に酒樽を持って鈴鹿御前は現れた。

寝起きの悪い珠藻は、その鈴鹿御前の行動に……

いとウザし……
っと思うのであった。

いとウザし……（後書き）

初めまして作者の……なんだっけ？ああ、天呼です。

第二話『いとウザし……』うpです。

内容が固まる迄、4日間悩みました。

2日目で完成はしてたんですが、内容が気に入らずうpしませんでした。

好きだけど、信じられない……正直、自分で書いていて意味が分かりませんでしたww

そして、珠藻のキャラは楽だったのですが、鈴鹿御前っというキャラが大変でした。

珠藻はツンツンしているキャラなんです、鈴鹿御前は一話目であまりにも不安定な存在でしたので、ギャグ担当（自虐的キャラ）としか設定していなかったの……

まあ、第二話と言うより、第一話になるんですが……

誰だって、友達になる時は出会いがありますよね？紹介されたり、何かの切欠で声掛けられたり……その切欠を描いてみました。

まあ、出会いなんて単純ですよ。って事で第三話は……知り合っの次の段階を描こうと思います。それではまた次回で（（。・ω・））。――）

※評価や感想、宜しくお願いします。よかったら前話も読んでね

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3079r/>

狐神様と鬼娘

2011年3月5日11時10分発行